

青年環境NGO Climate Youth Japan  
活動報告書



ユースが見た  
国連気候変動交渉の最前線  
UNFCCC COP27  
Sharm el-Sheikh

# TABLE OF CONTENTS

## Climate Youth Japan の紹介 ..... 3

CYJについて  
COP派遣事業について  
COP27派遣メンバー紹介

## COP27を通じたCYJの活動 ..... 5

COP/COYとは  
事前準備  
現地での1日  
COY17での活動  
COP27でのパビリオン登壇  
COP27でのパビリオン見学

## COP27の概要 ..... 15

議題設定  
シャルム・エル・シェイク実施計画概要  
緩和  
適応  
損失と損害（ロス&ダメージ）  
エネルギー  
パリ協定6条（市場メカニズム）

## 派遣メンバーの学んだこと&感想 ..... 19

内田大義  
山本陽来  
高橋櫻  
近藤壮真  
高尾文子  
望月碧  
石川柚葉

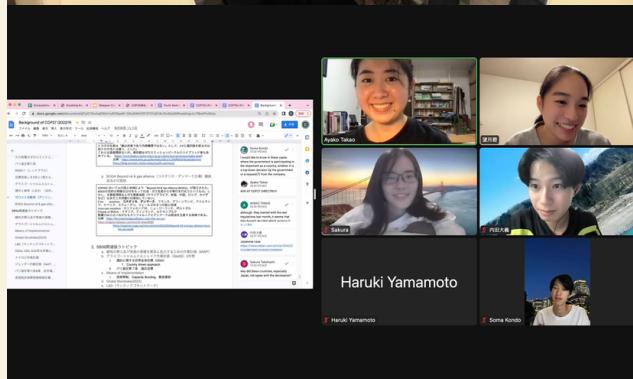
## 終わりに ..... 26

参考文献  
編集後記

# Climate Youth Japanの紹介

## CYJについて

青年環境NGO Climate Youth Japan (CYJ)は、気候変動枠組条約第15回締約国会議 (COP15)に参加した日本のユースによって、2010年3月に設立された、ネットワーク型の青年環境NGOである。「ユースが気候変動問題を解決へ導くことで、衡平で持続可能な社会を実現する」ことをビジョンとして、1.5℃目標の達成並びにユースが社会の意思決定プロセスに関わることを目指している。設立以来、政策提言活動及びそれを支えるプラットフォーム構築、関係省庁や国内企業・自治体との意見交換、国連気候変動枠組条約締約国会議 (以下COP)へのメンバー派遣や内部勉強会を通じた人材育成、国内外のユースへの気候変動問題に関する意識啓発などを実施してきた。今年度は、全国各地から集まったメンバー約50名がオンラインベースで活動しており、年に数回の対面ミーティング・合宿も開催している。2023年度は、これまでの活動で築いた海外ユースや市民団体、企業、省庁などとの多様なネットワークを長期的な連携に結び付け、国内外での気候リーダーの継続的な育成を目指し、さらにレベルアップした活動を行う予定だ。



## COP派遣事業について

CYJは、これまでに50名を超えるユースをCOP及び、COP前に開催されるユースの会議である「Conference of Youth (COY)」に派遣し、気候リーダーの育成に取り組んできた。12度目の派遣となる2022年度は、計7名のメンバーをCOY17とCOP27に派遣し、「国内外の意思決定者に対するアドボカシー」と「気候変動に関心はあるが行動に移せない日本のユースのエンパワメント」を主軸におき、活動を行った。具体的な活動内容は以下の通りである。

### 1. 国内外の意思決定者に対するアドボカシー

気候危機が世界各地で顕在化する中、CYJとして、また日本のいちユースとして、日本政府並びに国際的な場において私たちの声を伝え、気候変動対策にユースの声を反映する必要性を感じている。そのため、COP27では海外ユースとの共同サイドイベントや政府・民間団体との意見交換を実現することで、幅広いアクターの視野の獲得と、意思決定の場にユースの声を届ける機会の創出に努めた。具体的には、派遣前後の関連省庁との意見交換、現地での西村環境大臣との2度の意見交換に加えて、企業や研究機関の方との関係構築と海外ユースとの共同セミナー及びCYJの主催企画を開催した。COP27を通じて、計4つのパビリオンにて登壇した。

### 2. 気候変動に関心はあるが行動に移せない日本のユースのエンパワメント

COP27の会期中には、SNS・HPでの活動の発信やメディア取材、帰国後には報告会の開催と報告書の作成などを通じて、気候変動対策のルールメイキングの最前線や国を越えたユースの活動・意見を国内外に向けて発信した。これらを通じ、「気候変動問題に関心はあるが行動に移せないユース」の主体的な行動を促し、さらなる気候リーダーの発掘・育成に努める。

# Climate Youth Japanの紹介

## COP27派遣メンバー紹介



### 内田大義

東京大学法学部4年。政策提言統括（2021年4月～2022年3月）。現在は、企業や省庁、自治体との意見交換に多く参加。興味分野は脱炭素のためのファイナンスの動きやそのルールメイキングやカーボンプライシング。COY17の最終日とCOP27の1週目に参加。ジャパンパビリオンでIGES主催の日本とマレーシアの脱炭素に関する都市間連携のセミナーに登壇。



### 山本陽来

早稲田大学国際教養学部4年。福島原発事故をきっかけに再生可能エネルギーに興味を持ち、カナダ留学を経て環境問題全般に興味を持つようになった。CYJに参加したのはドイツ留学を始めた2021年9月。COP27の1週目に参加し、ジャパンパビリオンで日本とマレーシアの脱炭素に関する都市間連携のセミナーに登壇。



### 高橋櫻

慶應義塾大学環境情報学部1年。大学では地球環境、空間分析、デジタルアートを学ぶ。自然を仕事場とする職業に魅力を感じている。高校時代の農業従事者との関わりから、政策策定や気候変動に関心を抱きCYJに加入。CYJでは、企業や省庁との意見交換や会計として内部運営に携わる。COP27の1週目に参加し、現地では気候正義パビリオンのセミナーに登壇。



### 近藤壮真

東京大学法学部4年。エネルギー勉強会リーダー。高校時代にエネルギー関連の論文執筆に携わったことをきっかけに気候変動に幅広く関心を持つようになる。2020年度より2年間代表を務め、主に官公庁への政策提言を担当。COP27ではGlobal Methane Pledgeをテーマとした韓国パビリオンのセミナーに登壇。



### 高尾文子

国際基督教大学（ICU）教養学部2年（国際関係学・環境研究メジャー予定）、CYJ副代表・COP27事業統括。高校1年の時に海洋プラスチック問題の調査を行ったのをきっかけに環境問題に取り組むようになる。大学2年の夏にガーナでのプロジェクトを行い、途上国の開発、国際関係、気候変動をキーワードに勉強中。CYJでは広く官公庁との意見交換会や勉強会に参加している。



### 望月碧

国際基督教大学（ICU）教養学部1年。中学生から山登りをはじめ「環境問題」に関心を持ち、高校時代Plastic Free Campusのリーダーを務めた。オランダ留学を検討している最中に紹介されCYJに入り、2022年9月より広報統括。山登りと踊ることが好き。



### 石川柚葉

東京外国語大学3年。イタリア語専攻で、現在ヴェネツィアに留学中。横浜育ち。中学3年生の時に理科の先生に感化されて、地球温暖化への危機感を高める。大学受験が終わるや否や、念願の環境活動をCYJで始めることに。かれこれ2年半在籍していつの間にか古株の1人になっている。

# COP27を通じたCYJの活動



## COPとは

国連の気候変動枠組条約（United Nations Framework Convention on Climate Change：UNFCCC）に基づき、1995年以降毎年開催している締約国会議（Conference of Parties：COP）のことで、気候変動の適応と緩和における国際ルールを協議する最高意思決定機関である。2022年11月6日～20日に開催された第27回締約国会議（COP27）には、CYJメンバー6名が参加した。会場はBlue ZoneとGreen Zoneに分かれている。Blue Zoneに入るためにはUNFCCCが発行する公式バッジが必要で、閣僚級の会議をはじめ、政府・非政府組織によるサイドイベントや記者会見、パビリオンが開催されている。Green Zoneは市民のエリアとも言われ、バッジが不必要なことから市民団体や企業など様々な機関がブースを展開している。



## COYとは

Conference Of Youthの頭文字を取って、COYと呼ばれている。2022年11月2日～4日に開催されたCOY17には、CYJメンバー3名が参加した。毎年COPの直前に行われるこの会議には、世界中から気候変動に関心を持つユースが集まる。UNFCCC公認のユース組織である「YOUNGO」が運営しており、第17回目の今年は、140ヵ国以上の国から参加者が集まった。COPと比べてユースが主な参加者のため、よりフランクな雰囲気が会場全体にあふれていて、交流が非常に活発な点が印象的だ。COY17では、1日に30以上あるワークショップで、各国のユースと意見交換をしたり、各々の活動について紹介しあったりした。COYは他国のユースとの関係構築をするのに最適な場所だと言える。

# COP27を通じたCYJの活動

## 事前準備

派遣前の準備として、勉強会を通じたCOP27に関する知識の底上げ、イベントを通じたアウトプット、また国内メンバーによる広報スケジュールの策定などを行った。

勉強会は8月下旬から開始し、派遣メンバーを中心に作成した“Background of COP27”を用いてCOP26アウトカムと主要論点、SB56（UNFCCCの補助機関会合）関連で扱われたトピックの洗い出しから今後達成すべき目標などを、全10週間にわたるオンライン勉強会と2日間の対面ミーティングにて学んだ。同時に、気候変動関連の略語や国連会議に参加するうえで前提とされる用語をまとめた“terminology sheet”を作成し、メンバー全体の知識向上をはかった。

イベントを通じたアウトプットは、10月15日～16日に「ユースのCOP準備会」を行った。CYJは、2020年にLocal Conference of Youth（LCOY）と呼ばれるCOYの地域版会議を主催した。今年開催したものは、その代わりとなるイベントである。1日目には、高校生・大学生を対象として、環境省地球環境局総務課の石田大貴さまと都留文科大学地域社会学科教授で「エネルギー政策論」をご執筆された高橋洋先生をゲストスピーカーにお招きした。講義と参加者自身のカーボンフットプリントを計算するワークショップを行い、参加者と有意義な議論をすることもできた。2日目には、小・中学生を対象として、環境活動家の露木しいなさんとCYJメンバーの対談と蜜蝋ラップづくりのワークショップを行った。参加者が実際に手を動かして、環境にやさしい蜜蝋ラップに親しめる良い機会になったのではないかと思います。

そして、派遣メンバーがCOP27に全集中して臨める環境を作るため、10月上旬に国内で広報を担うチームを立ち上げた。派遣者の声とも言えるSNS発信をCOP27期間中はさらに強化していくため、前後合わせて3週間分の投稿スケジュールを策定した。

9/4 (sun) 9:00-16:00	cop派遣者集中mtg - インプットリサーチ ・ COP事業部集中mtg兼報告書作成mtg（興味/不安分野の洗い出し） → 分担表 Background of COP27 → Background of COP27 (2022/9) (9月末完成目標)
9/12	<ul style="list-style-type: none"> <li>1.5°C目標に対する各国の態度</li> <li>世界の化石燃料補助金の動向</li> <li>日本の石炭火力発電所の公的な輸出支援</li> </ul>
9/19	<p><b>以降、勉強会をコメント形式に変更</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>火力発電のゼロエミ化+CCUS（そうまさん）</li> <li>グローバル・メタン・ブレイク</li> </ul>
9/26 22:00-	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本の脱炭素進捗状況&amp;国際社会における評価</li> <li>水素アンモニアへ、1億ドル（113億円）規模の先導的な事業を展開</li> <li>ゼロエミ自動車</li> </ul>
10/3 21:00-	<ul style="list-style-type: none"> <li>環境国際協力を中心として知ってる限りで国際交渉の話</li> </ul>
10/8 集中mtg	<p>～勉強会～</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1.5°C目標に対する各国の態度</li> <li>世界の化石燃料補助金の動向</li> <li>日本の石炭火力発電所の公的な輸出支援</li> <li>損失と被害（L&amp;D）（サンティアゴネットワーク）（法的責任・保証の言及なし）、気候正義によるもの、資金枠合意されず：きざしさん</li> <li>官民合わせ年間\$1000億の詳細（うっちーさん）</li> </ul>
10/10	<ul style="list-style-type: none"> <li>BOGA Beyond oil &amp; gas alliance：はるきさん</li> <li>ジェンダー行動計画（GAP）：あやこ</li> </ul>
10/17	<ul style="list-style-type: none"> <li>カーボンプレジット（櫻さん）</li> <li>パリ協定第六条（櫻さん）</li> </ul>
10/23 集中mtg	<ul style="list-style-type: none"> <li>グラスゴーシャルムエルシェイク作業計画開始（適応グローバル目標）：きざしさん</li> <li>Means of Implementation：あやこ</li> <li>SDGsとのシナジー：きざしさん（・CBD or biodiversity関連）</li> <li>仙台防災枠組とのシナジー（はるき）</li> <li>Global Stocktake（さくら）</li> </ul>



### ユースのCOP準備会 Day1

10月15日10:00-15:45  
対象：大学生・高校生・中学生

公式Instagram (@climatyouthjapan) で随時イベント詳細を公開中！

**guest lecture**

日本のエネルギー・気候と世界の脱炭素に向けて

**workshop**

日々の生活でどれだけの温室効果ガスを出しているか計算してみよう！

ゲストスピーカー：  
環境省地球環境局総務課 石田大貴さま

事前申し込み受付中！お申し込みは5月31日まで、もしくはCYJの公式HPから前倒ししております。

### ユースのCOP準備会 DAY2

気候変動問題とプラスチック問題を考えてみよう！

10/16 (日) 10:00-14:40 @ ZOOM

午前

露木しいなさん ×  
Climate Youth Japanの学生の対談を聞いてみよう！

午後

みつろラップを作ってみよう！

# COP27を通じたCYJの活動

## 現地での一日

### COY17での1日

(石川)

9時ごろから多くのワークショップがスタートするため、それに合わせて宿を出て車で会場に向かう。COY17の期間は、滞在した宿のオーナーが毎日会場まで送ってくださった。毎日会場に到着したら、受付で登録をして、それが終わり次第興味のあるワークショップに参加していく。複数の場所で同時並行で様々なワークショップが開催されているので、前日の夜にどの時間帯にどのワークショップに参加するかスケジュールを立てておくようにしていた。大体各ワークショップは1時間～1時間半で、午前中に2つから3つほど参加した。お昼ご飯を会場内のカフェで調達し、お昼休憩を挟んだら再びワークショップへと向かう。自分たちがワークショップを開催したり、インタビューを受ける日もあったので、ワークショップへの参加はその他のスケジュールと上手く組み合わせて調整していた。午後も2つか3つのワークショップに顔を出して、大体19時ごろに会場を出る。帰りも宿のオーナーが車で迎えにきてくれていたので、夕食は家で食べることが多かった。夜は次の日の会議の準備をしたり（主にスケジュール作成）、CYJのタスク（広報のための情報整理）などに時間を使っていた。日付が変わる頃に就寝するような感じで過ごしていた。

### COP27での1日

(山本)

COP27・1週目のある1日の流れを紹介する。8時30分ごろにホテルを出て、5分ほど歩いて無料の市バスに乗り、8時55分ごろに会場に到着する。9時～10時は、SDG7パビリオンでセミナーを見学した。次に10時～11時に、IRENA（国際再生可能エネルギー機関）パビリオンでセミナーを見学し、11時～12時は、COY17でできたタイユースの友達に会うためにタイパビリオンを訪れた。12時からは、数日前に知り合ったチュニジア人のセミナーを見に行き、セミナー後に談笑した。それから、30分ほどドイツパビリオンでセミナーを見学した。15時30分～16時には、CYJメンバーの気候正義パビリオンでのセミナーを見て、その後は自分が登壇するセミナーの準備をした。16時30分～18時までジャパンパビリオンで開催されたセミナーに登壇した。登壇後は、数日前に知り合った日本人の大人の方々と一緒にご飯を食べに行った。



# COP27を通じたCYJの活動

## COY17での活動

### ワークショップへの参加

(石川)

毎日いくつものワークショップが会場のあちこちで同時並行で開催されており、気になったものに自由に参加することができた。私たちは全部で10個弱参加したが、以下では特に記憶に残っているものを抜粋する。

#### 1. IOM (国際移住機関) : The Role of Youth in Promoting Global Action on Climate Migration and Peace Nexus

気候変動の被害による人々の移住の現状や、その移住に伴う影響をより受けやすい女性や子供についてそのわけを学んだ。特に男性より女性が被害を受けやすい理由として、シングルマザーの存在、子供の世話への責任、職の失いやすさなどが挙げられており、気候変動問題の中で脆弱な女性の立場を改めて認識する機会となった。このワークショップでは、題名にもあるユースの役割について最後に話していたが、そこで紹介されていたエジプトで最近開催されたスタートアップのビジネスコンテストは、若い力を気候変動の解決へ導く方法として、とても価値のあるものだと感じた。

#### 2. A Conversation on Article 6

パリ協定6条の排出量取引についてのレクチャーを受けた。国際会議では、1.5°C目標達成のためにたびたび重要な議題とされつつも、なかなか話がまとまらないこの6条。排出量取引における現状や問題点を説明してもらい、多くのユースがこの取引の複雑な仕組みに困惑している様子が印象に残っている。排出量取引において、削減のキャパシティがある国は自然の豊かさなどゆえに比較的途上国が多かったが、果たして途上国はこの仕組みを使いこなせるのか疑問が残った。排出量自体を減らしつつも「実質ゼロ」を目指せる6条を、全ての国が理解して利用できる環境作りが必要だと感じた。

#### 3. New Technologies in Offshore Wind Development Ramy Emam

洋上風力発電についてのセミナーに参加した。日本では未だ普及していない洋上風力発電について、その仕組みや施工の仕方についてレクチャーを受けたほか、世界の様々な場所でどれだけ洋上風力普及の可能性があるかについても、あるサイトを用いて調べて比較した。日本は海に囲まれているので、予測発電量は多いと思われるが、実際にはなかなか普及が進んでいない。

施工の様子を動画で見た際に、スムーズに海上での作業が進むよう、事前に綿密な搬入計画や組み立て部品について考えられているようだったが、個人的には設置そのものによる海への環境負荷がとても大きいように感じた。また海の中にあることで、修復が比較的短いスパンで必要になるのではないかと感じ、持続可能性の高い発電方法なのか疑問に思った。

### インタビュー

(石川)

COY17の期間中に2つのインタビューを受けた。

1つ目は、ベルギーで「ユースが国際的に環境問題に取り組むきっかけ」について研究をしている韓国人のYi Hyun Kangさんからのものである。なぜ気候変動問題に興味を持ったのか、CYJでの活動、そのほかの場所(学校や日常生活)での活動、国際会議への参加の有無など30分ほどインタビューを受けた。

2つ目は、フロリダで海洋問題について研究をしているEstebanさんから「大学におけるサステナブルな取り組み」についてインタビューを受けた。前日のワークショップ(以下に記載する台湾ユースとの協働)に参加してくださった方で、それをきっかけにアジアのユース団体と合同でインタビューを受けることになった。主に自分たちの大学で行われているカーボンニュートラルに向けた活動を紹介した。



TWYCC Lynn



# COP27を通じたCYJの活動

## COY17での活動

### 台湾ユースとの協働

(石川)

Youth Climate Actions at Campus and the Challenges Taiwan Youth Climate Coalitionというワークショップを開催した。

台湾ユースのTWYCC (Taiwan Youth Climate Coalition) という団体に声をかけていただき、キャンパスにおけるサステナビリティについてプレゼンをし、プレゼンの後はワークショップ参加者と、各々の大学における取り組みや問題点についてディスカッションを行った。プレゼンではカーボンニュートラル達成への取り組みに積極的な大学である、東京外国語大学と千葉商科大学の2つの取り組みを紹介した。

ディスカッションパートでは、チリの大学で学生がサステナビリティの授業で学んだ知識を別の学生に教える、というアクティブラーニングの仕組みに多くの参加者が興味を抱いていた。エジプトの大学では、ペットボトルの削減数を可視化できるアプリを導入していたり、毎週学生が職員とカーボンニュートラル達成に向けて話せる機会があったりと、なかなか面白い策を聞くことができた。その一方でアジアの大学では、学生の環境問題への意識の高まりが未だに低いという意見が多かった。協働した台湾ユースやシンガポールのユースは特定の大学との繋がりがあり一緒にプロジェクトをしているようだが、CYJにはそういったものが特にない。しかし、だからこそメンバーの様々な大学の取り組みを共有しあったり、何かしらの協働を今後してみたり、大学同士の垣根を越えたプロジェクトを行うことも可能なのではと色々な可能性を感じた。

### 海外ユースとの交流

(石川)

自分たちが参加したワークショップの中で、食事の際に、インタビューを受けたりこちらからインタビューを持ちかけたり、ちょっとしたスペースで立ち話をしたり、などなどCOY17ではあちこちで気軽に海外ユースと交流することができた。20か国ほどのユースと出会ったように思うが、あまりにも国際的な環境で正確に数えきれていない。ワークショップを一緒に行った台湾ユースやシンガポールのユースとは、COP27での協働や帰国後の協働につながる関係構築ができたと思う。CYJ側から持ちかけたインタビューでは、エジプトの方にお話を聞くことができ、COY17・COP27開催国であるエジプトの環境意識について生の声を聞いたり、彼の関わっている環境活動についても話を伺えた。このインタビューはあくまでもインスタグラムでの広報のための簡単なものだったが、会場のあちこちでインタビューが行われていたので、今後のCOYでの活動の1つに加えてもいいと感じた。海外ユースと深く関わることでできるだけでなく、他国の環境問題への取り組みについて現地の人の声を聞けるととてもいいチャンスになると思った。

(山本)

COY17・COP27への参加を通して海外ユースとの繋がりを広げることができた。以下、COY17とCOP27を通じた海外ユースとの交流について、それぞれ記す。

まずはCOY17。COY17は、数歩歩けば違う国の環境に関心のあるユースに会える環境だった。全3日間を通して、たくさんのユースと出会って話して仲を深められた。もちろんCOY17で仲良くなったユースの出身国は様々だ。エジプトで開催されたCOY17では、アジア人であるだけでマイノリティなのでアジア人という理由だけで注目されることもあった。

次にCOP27。COP27にはCOY17参加者も多数いたため、両方に参加していたユースとは特に仲良くなれた。COP27では、COY17のようなユースだけが集まるサイドイベントはなかった。ただし、COP27で初めて設置されたChildren & Youth Pavilion (子供と若者のパビリオン) では、終始ユースによるセミナーが行われていた。また、ランチ企画などのアジア太平洋のユースで集まる機会もあった。

# COP27を通じたCYJの活動

## COP27でのパビリオン登壇

### Climate Justice Pavilion

(高橋)

毎年COP会場で共同セミナーを開催している、TWYCC (p.9で紹介した台湾ユース)の招待で、気候正義パビリオンにて登壇した。セミナーでは、アジア・アフリカ・アメリカのユース11名と共に、気候変動教育や気候正義についてパネルディスカッションを行った。私は、「自らの地域での気候変動教育の現状と理想的な気候変動教育」というテーマにおいて、日本での気候変動教育の現状とその改善案について意見を述べた。

登壇にあたり、私一人ではなく日本にいる他のCYJメンバーの意見も取り入れたいと思っていたため、団体内で意見募集を行った。そして、国際関係学や社会学、心理学を専門とするメンバーから寄せられた意見に自らの考えも含めつつ、CYJメンバーの多様な視点から、日本の気候変動教育と国際的に気候変動問題を先導できるリーダーの育成について発信できたのではないと思う。具体的には、気候変動分野において国際的なリーダーシップを発揮する人材を育成するためには、地域と国内外の政策・気候変動の影響を繋げられる知識・視野及び当事者意識を育む機会をユースに提供すること、地域社会や経済性とのコベネフィットを強調した教育手法が重要であると述べた。また、一緒に登壇した様々な国・地域のユースの意見からは、経済的・社会的背景が違うことによる着眼点の違いを感じられて興味深かった。



イベント名：Climate Justice, Climate Education, and 21st-Century Climate Leadership (気候正義、気候教育、21世紀の気候リーダー)  
日時：11/10 15:30-16:30 (UTC+2)  
場所：Climate Justice Pavilion (気候正義パビリオン)

### Japan Pavilion

(内田)

IGES (公益財団法人 地球環境戦略研究機関) の方の招待で、内田と山本がジャパンパビリオンにて登壇した。セミナーのテーマは、都市間連携で、IGESが関わったプロジェクトの報告と各都市の市長からのプロジェクトを通じた感想、気づき等を共有するというものだった。私と山本はプロジェクトの報告の後に設けられた、30分ほどのパネルディスカッションの登壇者として参加させていただいた。他の参加者は、ファシリテーターとしてIGESの方とマレーシアの大学教授、パネラーとしてマレーシアでプロジェクトを担当している機関のメンバーの方が参加された。ディスカッションテーマはプロジェクトの進捗と成果を聞いた感想の共有と、ユースとしてどのように都市間連携に関わっていいのかというものであった。

実際に登壇した感想としては、2点ある。1点目は、普段はなかなか直接意見を届けられないようなハイレベルな方々に、私たちの意見や考え、提案をすることができた点だ。全てが革新的であるわけではなく、既に議論されていることではあると思うが、実際に登壇の場で発言をすることでその議論を力強く後押しすることができたと考えている。2点目は、ユースの声を大切にしてくれていると感じた点だ。私たちの発言を肯定して認め、真摯に向き合ってくれる方が多かったように感じる。



イベント名：Japan-Malaysia City to City Carbon Neutral Collaborations (日本・マレーシアの都市間連携を中心としたカーボンニュートラル優良事例の紹介：ロックイーストポリシー40周年を記念して)  
日時：11/10 17:00-18:30 (UTC+2)  
場所：Japan Pavilion

# COP27を通じたCYJの活動

## COP27でのパビリオン登壇

### Children & Youth Pavilion

(近藤)

11月15日には、Children & Youth Pavilionにて“*The Road to Sustainable Society - From Green Finance and Energy Issues*”と題したポッドキャストを収録した。セミナーには、韓国(GEYK)、台湾(TWYCC)、そしてイギリスの若者を招待し、各国における金融政策やエネルギー政策について共有してもらった。まず、CYJから日本の現状を共有した後、各国のユースと意見交換をした。特にエネルギーについては、日本が抱えている課題(立地制約など)は各国ではどのようなものであるかを共有し合った。その中では、将来を担う若者世代として政府に対する野心的な目標への期待とともに、政策提言や具体的なイベント企画、若者の育成を通じていかに貢献していけるかという課題感を共有することができた。こうした若者同士が国の政策を正確に理解、共有する機会是非常に重要であると同時に、今後もネットワークを活かして継続的に議論などの機会を設けていきたいと感じた。



イベント名：Climate Finance and Energy  
@COP27  
場所：Children & Youth Pavilion  
Listen on Spotify! [here](#)

### Korea Pavilion

(近藤)

韓国パビリオンにて“Global Methane Pledge”に関するセミナーに登壇した。セミナーには韓国、中国、台湾のユースが参加し、各国のメタン政策と、それに対していかにユースが課題解決に関わっていけるかというテーマでプレゼンとパネルディスカッションを行った。私自身は日本のメタン政策について、温暖化政策全般における立ち位置などの観点から説明し、メタン排出削減に資するユースの取組として、CYJが昨年より実施しているプラントベースプロジェクトを紹介した。メタンは家畜から排出されるものも多く、そうした文脈で肉食を減らすことはメタン課題解決に資するという点である。メタンは、排出源が各国によって大きく異なり、日本や韓国では農業分野での排出が大きな位置を占める一方、中国では化石燃料採掘などに伴う排出が多く、解決に向けてはどのセクターへの働きかけが必要なのかが異なる、という点が興味深かった。

日本においては、農業の生産性を保ったままいかにメタンフリーの稲作に移行していくか、ユースとして貢献できる部分は少ないかもしれないが、勉強会などを通じてまず課題に対する理解を深めないといけないと感じた。



イベント名：Asian Youth Dialogue on Global Methane Pledge (グローバルメタンプレッジに関するアジアユース対話)  
日時：11/17 16:30-18:30 (UTC+2)  
場所：Korea Pavilion

# COP27を通じたCYJの活動

## パビリオン見学

### Japan Pavilion

(近藤)

ジャパンパビリオンは、例年通りセミナースペースと技術展示スペースに分かれていた。セミナースペースでは1日に4回ほどセミナーが開催され、中央官庁（経済産業省や環境省）や公的機関（東京大学やNEDOなど）が海外の要人を招待するなどして、90分ほどのプレゼン+パネルディスカッションを行っていた。一方で技術展示スペースでは、三菱電機や東芝など主に日本のメーカーが脱炭素に資する技術のリアル展示を行っており、訪れた人に対して担当者が詳細説明をしていた。他国比較で特徴的だったのは、是非はともかくセミナーでディスカッションに割かれる時間が少なく、登壇者が一方的に資料説明をする時間が多かったように思われる。海外の参加者にジャパンパビリオンの感想を聞く機会があったが、諸外国のもの比べて参加者自身の本音を聞く機会が少ないのは残念という声もあった。他方で、技術展示は海外のユースも含めて強い関心を持たれていたように感じた。脱炭素に向けては、やはり日本の技術に対する期待感が根強いことが実感できた。



←セミナーの様子  
外観→



### Mediterranean Pavilion

(高尾)

COP27期間中に参加したセミナーの中で私が最も滞在時間が長かったのは、地中海パビリオン（Mediterranean Pavilion）であった。Blue Zoneでは非常にたくさんのセミナーが開催され、CYJメンバーは個人の興味に沿って聴講した。

地中海パビリオンは、地中海地域のパートナーシップと団結の意思を示すために、COP27で初めて設置された。途上国関連、特にアフリカ地域に関心があった私は、北アフリカ諸国と南ヨーロッパ、そして国際機関がどのような連携をしているのかを紹介するセミナーに複数参加した。このパビリオンでは毎回アフリカ、ヨーロッパ、アジア地域といった様々な地域からのスピーカーが登壇しているのが特徴的であった。セミナーの中では各国間の公的機関の連携が重要視されており、他のパビリオンにて途上国からの登壇者で散見された金銭的支援・協力を求める意見はこのパビリオン内でも強調されていた。議長国エジプトから投資、教育、エネルギーなどの二国間パートナーシップに力点が置かれることも多くあったが、アフリカとヨーロッパを跨ぐ地域での連携を強調するパビリオンをCOP27で設置することに大きな意義があったと感じる。



セミナーの様子

←地中海パビリオン  
パートナーシップを強調する傾向

西アフリカ地域（ガーナ）パビリオン→  
金銭的支援・協力を促す傾向



# COP27を通じたCYJの活動

## パビリオン見学

### Ukraine Pavilion

(高橋)

パビリオン出展には多額の費用がかかるためすべての国がブースを持っていない中、COP27で初めてのウクライナパビリオンが設置された。戦争をテーマに、映像やVR、攻撃により破壊された木や土などが展示されていた。パビリオンは、小規模ながらも高さやディスプレイ展示を活用したつくりで、充実した構成だった。

特に印象的だったのは、攻撃を受けた後のウクライナの街を体験できるVRである。かつての姿が想像できないほど破壊された建物、車、橋などが脳裏に焼き付いた。その情景からは、エネルギー危機や食糧危機といったニュースで見聞きした社会問題を表す言葉だけでは想像できない、現地の人々の日常や現在の生活について思いを巡らすきっかけになった。また、銃痕が刻まれた木や劣化した土壌も記憶に残っている。それらの戦争により破壊された生態系が回復するには、50年以上もかかるそうだ。

COP27では損失と損害が注目されたが、気候変動の文脈以外での「損失と損害」を感じたパビリオンであった。



### World Bank Group Pavilion

(内田)

個人的に面白かったのはWorld Bank Groupのパビリオンだ。世界銀行が携わっているプロジェクトの説明や、その現状、課題についてが主なテーマであった。私が参加したセミナーの全ての登壇者が、アフリカを中心とした各国の大統領などの要人や国連機関の方だったこともあり、参加している人は基本的には政府関係者か国連関係者の方であった。セミナーの席ではユースや日本人を見ることはなかった。

私が個人的に面白いと感じたのは、参加者層の特異な点はもちろんのこと、データに関するあるセミナーの内容にある。地域ごとのデータの正確性と現実とのギャップ（島嶼国や小国、アフリカ地域ではギャップが大きい傾向がある）や、データの量と質の向上にどうファイナンスをつけるかと言った切り口から議論を展開していた点が非常に新鮮であった。地域やデータの種類ごとのコストの分類や、データから読み取れる異なる潜在災害リスクへのファイナンスモデルの構築も論点に挙がっていた。結論としては、機関横断や既存のデータベース間の互換性を高めることなどだったが、データを議論する際の論点を理解することができた点は大変勉強になった。日本ではデータの使い方に関して、それ自体がテーマになることはあまり見られないが、気候変動リスクをより正確に評価するために、この点に関してもっとオープンに議論をしていくべきではないかと感じた。



World Bank Group Pavilionにて私が参加したサイドイベントの多くでは、日本人の参加者はほとんどいなかった

# Column

## COY17



2日目くらいに完成したアーチ（会場整備が現在進行中であった…笑）

## エジプト事情

最初に乗り込んだCOY17派遣者は、まず初めての地で生き延びる方法を学ぶ必要があった。トイレにトイレトーパーがない、シャワーは冷水のみ、会場にWi-FiがないのにSIMが動かない、車がないとどこにも行けないなかタクシーは交渉から、スーパーは一ヶ所だけなど、枚挙にいとまがない。未知の地に何とか適応しようと初めの数日間は必死で過ごしていた。皆さん、エジプトに行く際はポケットティッシュを忘れずに…。

## GREEN ZONE



## メディアを通じた発信



## BLUE ZONE



COY17・COP27派遣期間中、派遣・国内メンバーの協力によって毎日のSNS上での発信をすることができた。Facebook、Instagram、Twitterでは会場の写真をコメントと共に紹介し、ホームページのブログでは派遣メンバーが日々感じたことを現地から報告した。CYJの独自メディア以外でも、読売新聞にCYJの活動を取り上げていただいた。記事にいただいた活動は、COY17への参加、ジャパンパビリオン、韓国パビリオンでの登壇である。

# COP27の概要

## 議題設定

(望月)

COP26では、2015年のCOP21で採択されたパリ協定における1.5°C目標を目指して全締約国が努力することが合意され、石炭火力の「段階的な削減」が成果文書に盛り込まれた。採択内容のうち、NDCの引き上げなど各国が自国の目標に対して強力なコミットメントを打ち出すはずであったが、COP27開幕前に国連に計画を提出したのはパリ協定締約国193か国中24か国であった（UNFCCC, 2022）。その所以で、COP27は実施（Implementation）のためのCOPと呼ばれ、「グラスゴー気候合意」の中で決定された緩和作業計画の策定、緩和に関するハイレベル閣僚級対話、適応資金の倍増などについて具体的、包摂的で大規模な議論が進むことが期待されていた。当初エジプト議長国は、1.5°C目標達成のための緩和策、現実となっている異常気象への具体的な適応策、先進国による1000億ドルの資金提供を含む気候変動資金について、官民連携して合意を行動へ移すことを目的としていた。結果として、アフリカ・途上国での開催となったこともあり、今回採択された「シャルム・エル・シェイク実施計画」では主に途上国支援に関して焦点が当たった。

## SSH実施計画概要

(高尾)

COP27で決定された「シャルム・エル・シェイク実施計画」では、10枚のドキュメントで16にわたる項目について記載された。内訳としては科学的知見と行動の緊急性、野心的な気候変動対策の強化と実施、エネルギー、緩和、適応、ロス&ダメージ、早期警戒と組織的観測、公正な移行に向けた道筋、資金支援、技術移転、パリ協定13条の強化された透明性枠組み、グローバル・ストックテイク（GST）、パリ協定6条（市場メカニズム）、海洋、森林、非国家主体の取組の強化等を含む内容が決定された。同決定文書は、昨年のCOP26全体決定「グラスゴー気候合意」の内容を踏襲しつつ、緩和、適応、ロス&ダメージ、気候資金等の分野で、締約国の気候変動対策の強化を求める内容となった。

COP27は、アフリカCOPということもあり途上国に焦点が当たったCOPであった。途上国からの議論で欠かせないのが気候資金についてである。COP27では、世界全体の資金の流れを気候変動の取組に整合させることを目的としたパリ協定2条1項(c)に関する理解を促進するための「シャルム・エル・シェイク対話」の開始を決定したほか、グラスゴー気候合意で決定された先進国全体による適応資金支援の倍増の取組に関する報告書作成が決定された。その他、生物多様性と気候変動への統合的対処、都市の役割、公正な移行等が記載された。ユースや子供たちの役割についても記述されており、世代間の衡平性と将来の世代のための気候システムの安定性維持の重要性を認識し、気候変動に関する政策や行動の実施プロセス・国家代表団や交渉担当者としてユースを含めることの検討などユースの参画を推進する内容が含まれた。



Standing Committee on Finance (SCF) の会議の様子

# COP27の概要

## 緩和

(近藤)

緩和分野では、昨年のCOP26の全体決定である「グラスゴー気候合意」の内容を引き継ぎ、具体的な実施計画の策定が期待されていた。COP27の全体決定「シャルム・エル・シェイク実施計画」では、2023年までに1.5°C目標に整合的な温室効果ガス排出削減目標（NDC）を設定していない締約国に対して、目標の再検討や強化を求めることが盛り込まれた。また、全ての締約国に対して、排出削減対策が講じられていない石炭火力発電の削減や、非効率化石燃料補助金からのフェーズアウトを含む努力を加速することを求める内容が含まれた。

加えて、COP27では、2030年までの緩和の野心と実施を緊急に高めるための「緩和作業計画」が策定された。同計画では、前提として、IPCCが1.5°Cの気温上昇では気候変動の影響が2°Cの場合よりはるかに小さくなると評価していることや、気温上昇を1.5°Cに抑える努力を追求することを決意したことが留意された。また計画期間を2026年までとし、毎年議題として取り上げて進捗を確認すること、全てのセクターや分野横断的事項（パリ協定6条（市場メカニズム）の活用含む）等について対象とすること、最低年2回のワークショップの開催と報告という一連のサイクル、非政府主体の関与、緩和作業計画の成果を閣僚級ラウンドテーブルで毎年議論することなどが盛り込まれた。日本は、全てのセクターを対象とすることや分野横断的事項の必要性を指摘し、これらが計画に反映された。一方で、先進国が新興国に対して野心的な削減目標の設定を促す一方で、新興国はこれに対して強く警戒したこともあり、議論は難航した。最終的には、この計画が「新しい目標やゴールを課すものではない」といった文言が入り、期待されていたような世界全体での緩和策の底上げには不十分だったのでは、といった声もある。

来年のCOP28では、2年間の気候変動対策評価の成果物である「グローバル・ストックテイク」が提出され、また今回の緩和作業計画の進捗が共有されることになるだろう。ウクライナ情勢等を受け、世界が気候変動対策に足踏み状態となっている現状の中ではあるが、現状評価や各国の削減ポテンシャルを踏まえ、COP28でも引き続き1.5°C目標への野心、またその達成のための具体的な決定が共有・強化されることを期待する。

## 適応

(内田)

最初に全体の議論を概観する。論点としては、具体的な適応の実施と資金の2点がある。

適応の実施に関しては、COP26でGGA（適応に関する世界全体の目標）に関するグラスゴー・シャルムエルシェイク作業プログラム（GlaSS）がアフリカグループから提案され、決定文書に採択された。GlaSSの主な議題は、適応の進捗評価に必要な方法論、指標、データ及び測定技術、ニーズ、支援の理解や国別適応計画（NAP）の実施強化、脆弱な発展途上国における適応措置の実施強化である。これらを踏まえ、COP27ではGlaSSのワークショップの中で取り上げられた議題に関する報告と審議を実施した。その中で、先進国と途上国で対立する主張が展開され、各国の事情に即した継続的支援努力のプロセスを評価すべきという先進国に対して、途上国のニーズにあった目標設定とそのコミットメントを評価すべきという途上国の主張がある。これらを踏まえ、COP27ではGGAの達成およびその進捗のレビューの指針となるべき“枠組み”について、COP28での採択を視野においた議論を来年実施することが決定された。資金に関しては、無償資金供与が多くを占める公的資金に依存している状態からの脱却は進んでいない。COP26の決定では先進国が拠出する適応資金を2025年までに2019年比で少なくとも倍増するという約束が含まれており、COP27では具体的なロードマップを検討した。議論は、UNFCCCの下に設置されている資金常設委員会に対し、適応資金の倍増に関する報告書を作成し、来年のCMA5（パリ協定締約国会合）で検討対象とするよう要請することで終着した。交渉外では、適応資金へのプレッジが発表され、日本も今年初めの600万米ドルのプレッジに加えて、追加で600万米ドルの拠出を約束した。

次に適応について会場でのサイドイベント等を通じた個人の所感を述べる。

1つ目はアフリカ諸国の適応の位置付けに関してだ。政府関係者に資金を呼び込むのはどうしてかと言う質問をした際に、緩和やロス&ダメージよりも適応の優先順位を高く見ていると伝えてくれた。その理由としては、植民地支配の時代に多くのものを失い、それを補完するために先進国は助けるべきだと述べていた。この理由からは明確な緩和と適応の優先度合いの違いについては見えないが、推察するに、現地では緩和を待つことができないほど気候変動の影響が身近であることからいち早く適応の施策を求めている、もしくは、政治的な工作で私を企業の人と認識して適応に資金を出すよう訴えたかったと言うようなことが考えられる。

2つ目の資金に関しては、森林が豊かなコンゴ民主主義共和国の方は、森林のカーボンクレジットに期待していると主張していた。カーボンクレジットを持っているアフリカなどの途上国とカーボンデット（負債）を負っている先進国と言う構造があるはずなのに、現在はクレジット側は利益を得られず、デット側は負担を負わず、不平等であるということを理由として述べていた。ただし、エジプトなど砂漠が多いアフリカの地域ではこの議論は通用しない（インドネシアやブラジルがパートナーとして候補に上がった）ため、地域ごとの足並みは揃っていないことがよくわかった。また、各国で持てる自然資本をどのように活用して資金を獲得しようとしているのかという観点から資金の議論を追うこともできるのだと新しい視点を見つげられた。



# COP27の概要

## 損失と損害（ロス&ダメージ）

（山本）

「ロス&ダメージが議題に入った。」COP27の2日目の夕方、COP会場からホテルに向かうためにバスに乗ると、気候ネットワークの方からそんな話を聞いた。ロス&ダメージは「気候変動の悪影響に伴う損失及び損害」のことだ。ロス&ダメージの始まりは、小島嶼国などの気候変動の文脈における脆弱国が中心となって、適応ではカバーしきれない気候変動の影響に対する補償について話し合おうとしたことである。ロス&ダメージは先進国の負担増加につながるため、支援をする側と受ける側の間で対立が起きやすい。しかし、COP27ではロス&ダメージが議題に採択された。このせいもあってか、ストックホルム環境研究所等で、COP27はAdaptation（適応）COPとも呼ばれている。

ロス&ダメージの議論の興隆のきっかけは2022年6月に発生したパキスタンの大洪水がきっかけと言われている。BUSINESS INSIDER INDIA等の報道によれば、同年8月末までにパキスタンの国土の3分の1が浸水し、死者は1500人を超えるとされている。このような甚大な自然災害が起こると、その復興に莫大な時間とお金が必要となる。REUTERSによると、パキスタンの大洪水の被害総額は2022年9月時点で3兆9000億円に及ぶ。この一件を受けて急遽、ロス&ダメージがCOP27の議題として含まれることとなった。なお、COP26における合意より、COP27では勝負の10年間（=2020年代）に「緩和の野心及び実施の規模を緊急に拡大するための作業計画（MWP）」の採択を目指し、COP28ではグローバルストックテイクの成果物の検討を実施し、COP29では2025年以降の長期資金に関する議論が行われる予定であった。

COP27のロス&ダメージに関する成果としては、「サンティアゴ・ネットワーク」の運用に向けた制度づくりが進められたことが挙げられる。「サンティアゴ・ネットワーク」とは、ロス&ダメージを受けやすい脆弱国に対して地方、国、地域レベルで技術的支援を促進するための関連機関のネットワークである。気候変動の影響がすでに世界中で出てきていることを鑑みると、ロス&ダメージは早急に制度づくりの段階を完了し、Implementation（実装）に移されなければならない。

## エネルギー

（近藤）

エネルギー分野では、COP26以降、主要国の基本的な政策の方向性に変化はなかったものの、ロシアによるウクライナ侵攻等を背景に、主要国で再生可能エネルギー（以下再エネ）・化石エネルギーの分野におけるエネルギー安定供給のための制度整備が進展した。COP27においては、今後一層のエネルギー需要増加が見込まれる途上国への財政面・技術面の支援が重要な論点になり、途上国の低炭素化ニーズに先進国がどのように応えて支援していくのが鍵の一つとなった。具体的には、再エネニーズに対しては、欧米や中国が財政面等での支援を活発化し、化石エネルギーニーズに対しては、CCUS／カーボンリサイクルや脱炭素燃料との混焼技術等の低炭素技術のいち早い適用がより重要とされた。

その中でも、COP27でよく聞かれた「公正な移行（Just Transition）」に焦点を絞り、エネルギー分野での進捗を記す。「公正な移行」とは、脱炭素社会への移行期における産業構造や生活慣習の変化に伴い、社会的な悪影響（雇用喪失や既存産業の衰退による）が生じるのを防ごうというものだ。特に、COP27が開かれた中東地域やアフリカ諸国では、この問題は深刻であり、先進国が途上国と協力しながら解決に向けて取り組むことが重要となっている。COP27では、石炭火力の早期閉鎖と再エネ拡大を目指す国際的なパートナーシップである「公正なエネルギー移行パートナーシップ」（JETP）が拡大した。これは、昨年のCOP26で、欧米諸国（フランス、ドイツ、英国、EU、アメリカ）が南アフリカの脱炭素化を目指して締結したのが始まりだ。JETPはパートナー国の化石燃料から再エネへの移行を進める一方、炭鉱労働者の雇用確保や地域社会の混乱防止に力を入れる。11月に行われたG20サミットでは、日本も加わり、インドネシアを対象とした脱石炭・再生エネルギー導入加速のためのJETPを開始したとする共同声明を発表した。今後3～5年間で官民合わせて200億ドル（約2兆8000億円）を拠出する計画とのことだ。

COP28に向けては、各国の再エネへの移行と化石燃料からの脱却の加速化はもちろん重要だが、どうしても取り組みが遅れてしまう、またトランジションの中での急激な社会変革に立ち向かう必要のある国々に対して、先進国が主導しながら国際的な連携を強め、グローバルに、迅速かつ「公正」な脱炭素化を進めていけるかが焦点となりそうだ。

# COP27の概要

## パリ協定6条（市場メカニズム）

（高橋）

パリ協定6条では、温室効果ガスの排出削減量の「取引」に係るルールについて話し合われている。主な条項は、取引のルールに関する2項・4項（市場メカニズム）と取引を行わない非市場アプローチと呼ばれる8項の3つである。また6条は、欧州地域が主導権を握る国連のルールメイキングにおいて、数少ない日本が先導している交渉分野でもある。それもあり、質の高い炭素市場構築に向けた「パリ協定6条実施パートナーシップ」の立ち上げイベントが、11月16日にジャパンパビリオンで開催された。6条交渉の概要に関しては、昨年のCOP26で、パリ協定の最後のピースと言われた6条の大枠が合意し、5年間にわたって議論されてきたパリ協定のルールブックが完成した。そしてCOP27では、6条をImplementation（実施）していくための詳細ルール策定に関するテクニカルな議論がなされ、概ね予定通りの決定となった。6条の実施においては、排出削減量の国際的な移転（2項）や削減量として国連に認められたクレジットの取引（4項）を行う際に、相当調整による二重計上の防止及び定期的な報告や登録簿を用いた管理運用体制を整備することで、「環境十全性（Environmental Integrity）」と「透明性（Transparency）」を保証できるかが注視されている。実際に会議場内でもこの2つのワードが頻りに飛び交っていた。特に、EUやAILAC（中南米・カリブ海独立連合：チリ、ペルー、コロンビア、コスタリカなど）といった交渉グループが積極的に発言していた。

次に、COP27では非政府主体（企業やNGOなどの政府以外のアクター）の活発な活動が目立ったが、6条関連でも交渉外で色々な動きが見られたので、特に印象的だったものを紹介する。まず、6条は私が知っている中で唯一、会期中に出される文書案に対してユースの提言書（非公式）が作成・配布される。その提言書の中で個人的に印象に残っていることが、6条の決議文書において先住民をはじめとする人権に関する言及がないことへの警鐘だ。もちろん、登録簿の仕様や報告、二重計上防止を着実に行うための管理運用体制に関する指摘もあったが、6条の運用段階に一見関係がないような「人権」が重要視されていることが印象的であった。つまり、いくら制度的に完璧に運用できるような仕組みを作っても、そこに「人権」への考慮がなければ、実社会においては運用できないということであろう。また、提言を主に行っている非政府主体は、各国政府が「排出量の削減」をいかに真剣に、成果を伴って実施する「意志」があるかを注視しているように感じた。その姿勢からは市場メカニズムにおける排出権取引に対して、排出削減国へのインセンティブを含む経済活動や排出量測定における国家間の連携を促すことに繋がるかもしれないが、「市場メカニズム」に頼りすぎてしまうと、排出量を移転しているだけで、世界全体の排出量削減には繋がらないのではないかと危惧していることが感じられた。

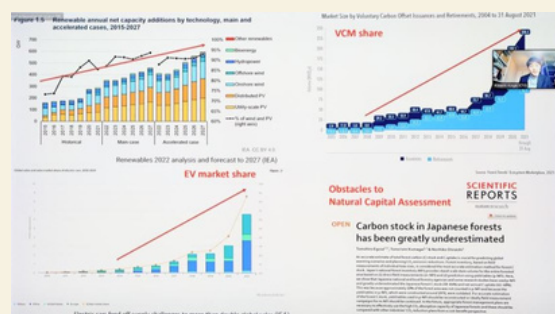
そして、6条4項クレジットの取引に向けた国連の運用体制が整うまで、まだ2〜3年はかかると言われている中、民間主導の炭素市場の構築や新たなイニシアティブの立ち上げが、昨年のCOP26閉会後から非常に活発になっている。私もいくつかの立ち上げイベントに参加したが、具体的な管理運用体制や市場規模を検討するのではなく、「環境十全性や透明性を担保する」や「パリ協定6条に準ずる」といった概念的な発言が多かった。発言している側も6条の複雑な仕組みや専門用語の概念がきちんと理解できていないのかもしれないと感じた。いずれにしても、各イニシアティブが立ち上げイベントで終わらないように、より専門的な制度設計と実装力に注目したい。

## 生物多様性と気候変動

（古賀）

気候変動問題と並び国際社会で注目されている環境問題の一つに、生物多様性の損失がある。生物多様性に関する議論は、気候変動枠組条約締結と同年の1992年に締結された「生物多様性に関する条約」からより活発化してきた。COP27会期の約2週間後にあたる2022年12月7日〜19日に、カナダのモントリオールにて開催された生物多様性条約第15回締約国会議第二部（CBD/COP15）では、「生物多様性戦略計画2011-2020及び愛知目標」に代わる世界目標として、2030年を達成目標とする全23のターゲットを持つ「昆明・モントリオール世界目標」を含む「ポスト2020生物多様性世界枠組（GBF）」が採択されるなど、気候変動分野におけるCOP21と同等の転機となる会合となった。ターゲットでは、先住民及び地域社会に配慮した陸域・海域の30%の保全（30by30）、自然を基盤とした解決策（NbS）等を用いた気候変動緩和・適応・防災能力の回復及び強化などの自然の管理・活用に関するものから、ビジネスにおける影響評価・情報公開等の奨励、情報・政策決定の参加、司法へのアクセスの機会均等など、多岐にわたる政策アジェンダが合意された。実施のフェーズに入る生物多様性保全策とCOP27を経た気候変動政策の連関は、今後より一層顕在化することが予想され、自然との向き合い方が今問われているように感じる。

12月16日に開催されたCBD/COP15のサイドイベントに  
CYJ代表・古賀がオンライン登壇→  
"Intergenerational Dialogue for Strengthening Linkages  
between Biodiversity and Climate"  
(Photo by IISD/ENB)



# 派遣メンバーの学んだこと & 感想

## 内田 大義



大きく3点に分けて記述する。

### 1. 最も知りたかったこと

COP27に参加するにあたり、学びたいと思っていたことは、「資金を呼び込む論理」を当事者から伺いたいということだった。この問いに対する自分なりの答えと考えを得ることができたと思う。基本的にはCOP27参加期間中、様々なサイドイベントに出る中でファイナンスの議論を追ったが、そこで印象的だったのは、カネ金moneyのオンパレードであったことだ。その根拠は、途上国は先進国に比べて経済が弱いから発展する必要があり、そのために投資が必要であるというものや気候変動の影響を最も受けるから必要というものなど、不平等を核にした主張だった。資金を受け取った後の具体的な使い方は、太陽光パネルなどのエネルギー系ばかりであり、教育や第一次産業の持続可能なモデルへの転換等エネルギーインフラ以外では具体案は聞けなかったと記憶している。その理由としては、エネルギーアクセスができない世帯が人口の半数ほどいるというアフリカ地域では、貧困や不平等への対応の優先順位が高いということが考えられる。以上のようなサイドイベントでの議論や、個人的にアフリカの政府関係者に話を聞く中で、生活水準の向上を焦点に経済発展が気候変動対策よりも優位にあり、気候変動を通じて資金を呼び込み、いかにグリーンな方法で発展するかという発想で対応していることがわかった。

### 2. 若い世代での気候変動の動き

海外ユースなどとの交流を通じて、特に交流の多かったアジアの先進国の中では、気候変動が高等教育者の中でのムーブメントであることを感じた。これは各国での気候変動への意識の高まりは若い世代でどうなのかを聞いた結果や、来ているユースの多くが留学をしていたり、修士博士課程に進学していることなどを踏まえて個人的に思った部分である。

### 3. ジェンダー

特にアフリカの政府関係者は男女比が同じくらいのように感じ、環境大臣など政府大臣は女性の方が多く印象を受けた。

最後に、COP27の会場でなければお会いできない方々とお会いし、様々な経験、取り組みや気候変動に対する考え方を勉強し、とても刺激を受けた。気候変動に限らず、物事の見方など根本的な部分でも学ぶ部分が大変多かった。二次・三次のデータ・情報ではなく実際の第一人者や当事者などから一次情報を知ることの重要性を身をもって知ることができた。このような貴重な経験をさせてくれたCYJや色々教えて下さった方々に深く感謝します。

# 派遣メンバーの学んだこと & 感想

山本 陽来



COP27参加の目的は三つあった。一つは、エネルギーに関する知見を広げること。もう一つは気候変動の影響を受ける国が多いアフリカからの参加者の話を聞くこと。加えて、海外ユースとの繋がりを作ることだった。

現地ですんだことは五つある。一つ目はCOY17で話したレソト人のユースから聞いた話だが、アフリカの途上国ではインフラなどが確立していないため、気候変動関係に限らず、データ収集などが難しい状態にあること。気候変動対策もまずは実態の把握から始まるが、それができないようだ。次に、COYやCOPには気候変動の影響をひどく受けているような当事者は来ていないということ。当たり前だが、お金や時間的余裕がない人はCOYやCOPにはなかなか参加できない。ハイレベルの会議では仕方がないことかもしれないが、COP27も当事者不在のまま議論が進められていたようだ。三つ目は、エジプトで水シャワーを浴びて思ったことだが、SDGsは西側の押し付けなのではないかという問題意識だ。これまで電気なしで幸せに生きてきた人に対して電気を強引に導入させることが果たして正義なのだろうか。私にはお湯のない生活をしている人たちが「持たざるもの」とはとても思えなかった。最後は、ユースも一人前の意見を持っているということへの気づきだ。COP27で出会ったチュニジア人のユースはパリ協定6条の交渉官をしていると言っていた。まだ30歳に満たないユースでも一国を代表して交渉していると知って軽くショックを受けた。今後は一人前に自信を持って意見できるようになりたいと強く思った。

今回のCOP27は特にImplementation（実装）COPと言われていた。COPの議論もゆっくりではあるが着実に理論から実装へとフェーズが移っているようだ。私もその流れに乗って、今後はより具体的な事例やデータを参考にしながらより実装に近い部分の勉強をしたい。

# 派遣メンバーの学んだこと&感想

## 高橋櫻



オブザーバーが1人だけの会議後に  
ガーナの交渉官からもらったチョコ



私のCOP27への参加目的は、関心分野の探求とCOP27への参加をきっかけとした国・世代を越えた継続的な関係構築の2つに分けられる。関心分野に関しては、パリ協定6条のルールメイキングの現場と気候変動分野における自然資本への注目度を、自分の目と耳で知りたかった。継続的な関係構築に関しては、国連のルールメイキングの場における、日本ユース及び他国のユースのプレゼンスの確認を行い、そこにどのように参画していけるかを検討することを目標とした。

そのため、渡航前からCOP27に参加するユースのWhatsAppグループに複数参加したり、LinkedInを定期的にチェックしたりして、情報収集を行った。現地では、定期的に開催されるアジア太平洋地域のユースのミートアップや食事会などに積極的に参加した。また、ユースや政府関係者に限らず、社会の仕組みづくりを行っている方との対話にも努めた。例えば、予め関心のあった分野・機関の方にアポイントメントを取ってお話する時間を設けていただいたり、COP27に参加する旨を間接的に聞いた方と事前に連絡を取り合うことで情報共有を行ったりした。それにより、現地で紹介していただいた方や話した内容の量・質ともに充実したものとなった。

そして、COP27で出会った方々との今後の連携も現在進行系で進められており、目標であった世代・国を越えた継続的な関係性を築く第一歩であると感じている。また日本にいたら出会えなかったであろう、社会の最前線で肩書ではなく自分の名前で活躍している方や本質を見る力を持ち、その知見を社会に実装している方と繋がれる環境が目の前にあり、そういった方々との話から、私の中には存在しなかった視野や選択肢を得ることができ、今後の人生観に大きな影響を与えるきっかけとなった。「COP27に行く」ことで終わるのではなく、行ったことで得た関係や考えを、今後のCYJの活動や自らのキャリアに活かしていけるように精進することが、私が様々な援助をしていただき地球の裏側まで行った意義だと感じている。しかしながら、意思決定者との意見交換 (bilateral meeting) や交渉での発言 (intervention)、提言書 (Global Youth Statement) の作成には、情報不足と時間の制約により関われなかった。そのため、今後の派遣メンバーがそれらの機会に参画できるように情報提供や引継ぎ・連携をしっかりと行う。

その他にも、会場で衝撃を受けたことや疑問を抱いたことを書き記したいのだが、枠の関係で他の場所で書くことになりそうだ。興味のある方は共有するのでぜひ声をかけてください。

最後に、ここまで報告書を読んでくださった皆様、派遣前のアクレディ獲得や怒涛のパビリオン応募・準備、毎週のミーティングから、派遣後の報告会登壇・報告書制作まで尽力したCOP27派遣メンバーを中心としたCYJメンバー、COP27渡航を応援してくださった家族、先生、知人・友人に心から感謝を申し上げます。

# 派遣メンバーの学んだこと & 感想

近藤 壮真



COP27において得られた成果としては、当初の目的でもあった地域間での気候変動政策、特にエネルギー政策に対する態度の差異の理解を促進することができたこと、そして若者間の繋がり獲得である。

まず、私自身は、各国のエネルギー政策が、ウクライナ情勢や昨今のインフレを受けて変化しており、それがカーボンニュートラルの達成に向けて大きな違いとなっていくのではないかという仮説を持っていた。そして、実際にそれが現実となるのではないかという感覚を得ることができた。欧州では、エネルギー安全保障の観点から、再生可能エネルギーへの移行、そして化石燃料からの脱却を早急に進めていくという姿勢であった一方、米国や英国では、もちろんトランジションは重要であるが、公正な移行（Just transition）やインフレへの対応なども並行しながら段階的に進めていくという空気感が感じられた。しかし、日本がこうした世界の動向を受けてどのような立場を取るのか、今回のCOP27では明確に見えなかったという点は心残りであり、今後ともより自分ごととして考えていきたい。

そして、世界各国の若者とCOP27の場で様々に意見交換できたことは、かけがえのない貴重な体験であった。政府のサポートを受けて来ている若者から、一人の大学生として自費でエジプトまで来ていた若者まで、年齢層もバラバラであったが、それぞれが、この世界が少しでも良くなるためにはどのような解決策が考えうるか、また出身国が持っている強みはどう活かせるか、など本気で意見をぶつけてきたことは印象的であった。私も、日本に生きていく一人の人間として、現地で構築したネットワークを活かし、また刺激を受けながら、今後も精力的に気候変動解決に貢献していきたいと感じた。

# 派遣メンバーの学んだこと & 感想

高尾 文子



まず初めにCOP27に参加した目的として「『支援する側』とされる先進国で育った私が、これから発展する段階にある人々に対し、国際社会の構造的拘束から抜け出した持続可能な生活を送るためにできることは何か。」という問いへの糸口を見つけるためであった。先進国が現在途上国支援として行なっている、技術支援/輸出、経済支援/投資を最大限有効活用するためには、途上国を支援や投資の対象とするのではなく、国際社会を構成する1つのステークホルダーであるという意識が欠かせない。

私はガーナの地方で1ヶ月生活していた中で気候変動の話をする「気候変動は神の業、神に祈って無事を祈る」「気候変動もだが、政権崩壊が深刻」と対話を終了させられてしまう経験が幾度とあった。この経験から気候変動関連の国連会議で途上国代表が行うスピーチと、現地の環境意識の低さのギャップがあることを実感し、途上国から来たハイレベルの人との対話を通して自らの問いへの糸口を見出したいと思っていた。

COP27でアフリカ（ガーナやカメルーンなど）地域から来た政府関係者との対話を通して、ローカルな問題の認識が字面的な理解に止まっているように感じた。例えば上記のガーナの地方における環境意識の低さをガーナ政府関係者に話した時、環境教育の推進を紹介いただいた。しかしその話の中では根本的な問題原因に迫っていないように感じた。ハイレベルとローカルの連携が不十分という課題は日本も抱えており、ソフト面から気候変動にアプローチする際の問題は万国に共通することを実感した。

また、アフリカ関連のサイドイベントでは地政学的な視点が強調されており、途上国の中でも地理的に有利な国の発展が進んでいることはパビリオンの様子から実感できた。アフリカの中でも地中海地域諸国はヨーロッパとの協力関係が深化する中、西アフリカ地域は投資の対象であり続けているという差や、Green Zoneに独立して設置されたサウジアラビア・パビリオンではジャパンパビリオンのような技術展示を行っていた。この途上国（特にアフリカ周辺地域）の中で「発展」の捉え方に差が生まれているのは非常に興味深い発見であった。

最後に、ユースが国際会議に参加する意義について記す。ユースとしてCOP27という国際会議に参加したことは気候変動交渉現場を見てきたのではなく、潮流が生まれる現場を見てきたということ伝えたい。COPは各国の現場の状況を持ち寄って話し合う場である。そして持ち寄った内容によって気候変動の議論の中に自然に潮流が生まれる。すなわちCOPは潮流を生み出すためにリソースを持ち寄る場であると考えている。その中でユースは、学問の基礎や社会の構造を学ぶ過程であり、かつ所属などに縛られずに自分の興味本位に従って動き、学ぶことができる。この特性を踏まえ、日頃そしてCOP27会場で多くの方が学びの機会を与えてくださった。知識量・想像力・視点・社会的責任・権力など様々な違いがある方々と気候変動の議論というプラットフォームに立って話すことができ、その後率直に感じたことを表明することができる。私を含め、ユースは即時的な利害関係などが発生する以前の状態であることから、ある意味では客観的に気候変動対策についての意見を言える立場なのかもしれない。ユースは「利害関係を持たずに、感性を尊重して動くことができる社会のステークホルダー」として国際会議に参加する意義があると再認識した。

ユースという一種の特権を最大限活用し、今後の気候変動対策の議論に参加していくことは、将来世代としての使命であり、今後更なる高みを目指した活動を進めていきたい。

最後に、COP27参加のために非常に多くの方に協力いただき、心から感謝申し上げます。

# 派遣メンバーの学んだこと & 感想

望月 碧



私がCOP27に参加した目的は、自分の立場と行動を再考することである。1週間の派遣を通し、北から南、ユースから大人まで本当に多種多様な人々と対話をする中、概ね目的は達成できた。気候変動に取り組む日本のいち学生として更なるチャレンジを続けていきたい、と強く感じた。CYJで活動していると、気候変動に何かしらのアクションを起こそうという心持が自分の中に常にあるが、COP27ではそれを更に上回る行動力を持つ（専門分野が気候変動である大学院生や、企業を立ち上げた社長など）ユースが多数いた。私は、自分が本当にやりたいものとは何なのか、を常日頃模索している大学1年生に過ぎない。考えを実行に移しCOP27まで通々飛んで行けたことは大変に恵まれた環境に身を置くことができていると自覚し、「気候危機をなんとかしたい」を思う日本の学生への道筋のひとつと成れるよう、適切な広報・啓蒙活動に力を入れていく必要があると感じた。また、日本のメディアで取り上げられるような情報はすべて二次情報であることを理解し、国際常識に追いつくためには自ら各機関・主要メディアの情報を日毎にチェックする必要があると感じた。実際、帰国後すぐにニュースレターのサブスクリプション登録のためにあちこちのウェブサイトを駆け回った。

私は今後3年間の大学生活を通して、このCOP27で培ったネットワークを活かしCYJでの海外事業に力を入れつつ、同時にユースとして、あらゆるステークホルダーの意見を中立的に聞き入れながら、自分の本当に興味あることを見つけるまで勉強を続けたいと思う。将来を担う世代として、モチベーションを高く持ち、行動する気概を持ち続けたい。

最後に、COP27派遣のアクレディテーションをくださったNGOの方々、渡航までサポートしてくださったメンバーのみなさん、現地でお世話になった全ての方々に感謝いたします。ありがとうございました。



# 派遣メンバーの学んだこと & 感想

石川 柚葉



COY17に参加した目的としては、海外ユースとの繋がりを作ることが一番大きなものであった。COP事業がCYJの活動の大きな柱であるにもかかわらず、海外ユースと協働する機会が少なく、日本外における気候変動の動きを掴むのがなかなかできていない現状だったため、COY17に行くことで海外ユースと今後の協働につながるような関係を構築したいと考えていた。またCOYやCOPに参加したCYJの先輩方から、海外ユースの熱気を是非とも現地で感じるべきだという声も多く聞いていたため、これからの環境活動のモチベーションをさらに高められるのではないかと期待もしていた。

私はCOY17の3日間のみ参加した。世界中から集まった海外ユースを目の当たりにしてワクワクした一方、ワークショップに参加するとオーガナイザーから投げかけられた質問にスッと手をあげて、堂々と答える海外ユースに圧倒される場面も非常に多かった。会議の内容はなんとか理解してついていくことができても、会議中に自分の意見を言うことは簡単ではなかったため、ワークショップの後に自然と海外ユースと交流する中で自分たちの考えを共有したり、お互いの活動を紹介した。日々変わっていく気候変動のトピックについていくことはもちろん、それに対して自分はどう考えるのか、どう動けるのか、考える癖をつける必要性を痛感した。また英語での情報収集や海外ユースとの継続的な関わりは、国際的な会議に参加するにあたっては欠かせないことだと思った。

今後の展望として、元々のCOY17に参加した目的である海外ユースとの繋がり構築はある程度達成できたと感じているので、まず来年のLCOY開催に関して彼らを招待し、一緒にプロジェクトを作り上げたい。日本のユースの意見、海外ユースの意見をまとめあげ、COY18にそってCOP28へ持っていくことをどこまで具体化し意味のあるものにできるかが非常に重要だと思う。COPはユースの意見を様々なセクターに反映できる非常に価値のある場所の1つだと思うので、「より長期的な、より積極的な、気候変動対策」をユースの立場から強調していきたいと思う。また今回のCOY17、COP27での学びを日本の人々へ還元することもとても大事だと痛感しており、特に同世代であるユースを本格的に気候変動問題に取り組めるように後押しできたらと考えている。気候変動問題に関心のある人、危機感を抱いているユースは少なくないはずだが、行動に移す段階でどう動けばいいのか分からない層に対してアプローチをして、国際的な視点からも考える機会を提供したい。

COY17に参加する機会をいただけて本当に光栄だった。関わっていただいた全ての方に感謝している。

# 終わりに

## 参考文献

- BUSINESS INSIDER INDIA (2022) 「A third of Pakistan is under water as devastating floods kill more than 1,500, officials say」 [https://www.businessinsider.in/international/news/a-third-of-pakistan-is-under-water-as-devastating-floods-kill-more-than-1500-officials-say/amp\\_articleshow/93883851.cms](https://www.businessinsider.in/international/news/a-third-of-pakistan-is-under-water-as-devastating-floods-kill-more-than-1500-officials-say/amp_articleshow/93883851.cms)
- COP27 Presidency (2022) 「Vision & Mission」 <https://cop27.eg/#/vision#goals>
- IGES (2022) 「パリ協定と気候変動適応 適応に関する世界全体の目標(Global Goal on Adaptation)の課題と展望」 [https://www.iges.or.jp/jp/publication\\_documents/pub/briefing/jp/12424/%E5%B7%AE%E3%81%97%E6%9B%BF%E3%81%88\\_Cleaned\\_SB56\\_GGA%E3%81%AB%E9%96%A2%E3%81%99%E3%82%8BBriefing+Note+OMAM\\_NS.pdf](https://www.iges.or.jp/jp/publication_documents/pub/briefing/jp/12424/%E5%B7%AE%E3%81%97%E6%9B%BF%E3%81%88_Cleaned_SB56_GGA%E3%81%AB%E9%96%A2%E3%81%99%E3%82%8BBriefing+Note+OMAM_NS.pdf)
- IGES (2022) 「COP27結果速報ウェビナー」 <https://www.iges.or.jp/jp/events/20221125>
- IGES (2022) 「COP27の焦点 脱炭素化に向けた最新動向」 [https://www.iges.or.jp/sites/default/files/inline-files/20221025\\_Tamura\\_0.pdf](https://www.iges.or.jp/sites/default/files/inline-files/20221025_Tamura_0.pdf)
- IISD (2022) 「Rio Convention Pavilion at COP15 - Highlights and images for 16 December 2022」 <https://enb.iisd.org/rio-conventions-pavilion-cbd-cop15-16dec22>
- REUTERS (2022) 「パキスタン洪水、国連総長が国際支援呼びかけ 「世界的危機」」 <https://jp.reuters.com/article/pakistan-weather-floods-idJPKBN2QD03U>
- Stockholm Environment Institute (2022) 「Shifting the narrative on adaptation at COP27」 <https://www.sei.org/featured/narrative-adaptation-cop27/>
- 環境省 (2022) 「COP27 (国連気候変動枠組条約第27回締約国会議) の結果概要について」 [https://ondankataisaku.env.go.jp/carbon\\_neutral/topics/20221222-topic-39.html](https://ondankataisaku.env.go.jp/carbon_neutral/topics/20221222-topic-39.html)
- 環境省 (2021) 「気候変動枠組条約第26回締約国会議 (COP26)について」 <https://www.env.go.jp/content/000049860.pdf>
- 外務省 (2022) 「国連気候変動枠組条約第27回締約国会議 (COP27) 結果概要」 [https://www.mofa.go.jp/mofaj/ic/ch/page1\\_001420.html](https://www.mofa.go.jp/mofaj/ic/ch/page1_001420.html)
- 国立環境研究所社会システム領域 (2022) 「“パーマクライシス” 下で開催されたCOP27は成功か？失敗か？」 <https://www.nies.go.jp/social/navi/colum/cop27.html>
- 国連広報センター (2022) 「今年のCOP27について、知っておくべきこと (UN News 記事・日本語訳)」 [https://www.unic.or.jp/news\\_press/features\\_backgrounders/45388/](https://www.unic.or.jp/news_press/features_backgrounders/45388/)
- 三菱UFJリサーチ&コンサルティング (2020) 「気候変動への適応を評価する ～民間参画に向けた考え方と視点～」 [https://www.murc.jp/wp-content/uploads/2020/06/seiken\\_200616.pdf](https://www.murc.jp/wp-content/uploads/2020/06/seiken_200616.pdf)

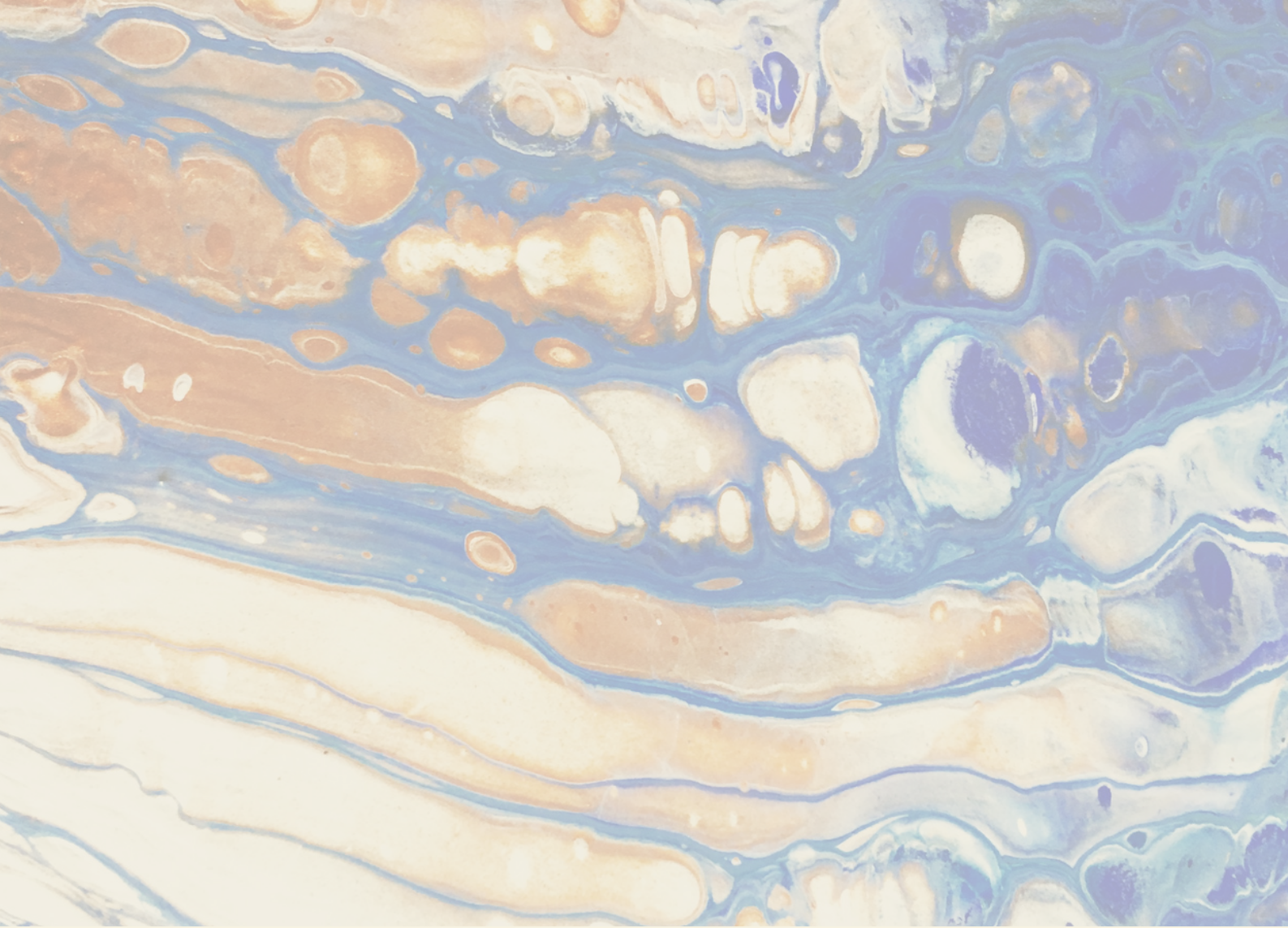
## 編集後記

COP27事業が2021年3月に始動してからこの報告書をリリースするまでの一年弱、非常に多くの方にサポートいただいた結果、COP27事業は幕を閉じる。COP26に比べ、CYJ派遣メンバーの増加や会場ロジスティックの面で想定外のことが多々発生したが、今年も日本の若者が気候変動交渉・気候変動分野の潮流が作られる場のUNFCCC COPに参加し、若者の存在を届けることができた実感している。

この1年間、ロシアのウクライナ侵攻による危機的事態や歴史的なインフレなど社会情勢の不安定化によって、気候変動の議論が二の次になってしまうのではという懸念も大きくあった。そんな中開催されたCOP27では、いかに多くのセクター・人々が心血を注いで気候変動問題に取り組んでいるのか、そして気候変動と他分野のシナジーが育まれる様子を垣間見た。

締めくくりとして、これまでCYJに携わってくださった方々、ユースの気候変動分野参画に尽力してくださる方々、CYJメンバー・関係者の皆様に心からの感謝を申し上げます。

COP27事業統括 高尾



青年環境NGO

Climate Youth Japan

Webサイト: <https://www.climateyouthjp.org/>

Facebook: <https://www.facebook.com/climateyouthjapan>

Twitter: @climateyouthjp

Instagram: @climateyouthjapan

note: <https://note.com/cyj>

連絡先: [climateyouthjapan@gmail.com](mailto:climateyouthjapan@gmail.com)